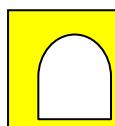


日吉台地下壕保存の会会報

第113号
日吉台地下壕保存の会第21回
横浜・川崎平和のための戦争展

亀岡敦子(運営委員)

第21回横浜・川崎平和のための戦争展
慶應義塾大学来往舎 2013.10.12・13

以上の破壊を防がなければなりません。それを訴えるための戦争展です。

昨年から、日吉に隣接する川崎市中原区の「中原の空襲・戦災を記録する会」が実施団体にくわわり、広がりと深さが加わりました。当会が長年にわたり調査していた港北区の空襲記録が、中原区と隣接する地図上に赤く記され、この空襲地図は今回の展示会場で目玉のひとつとなりました。

まず来往舎に入ると1階のイベントテラスいっぱいに約200点の展示が目にはいります。緩やか

今年で21回目をむかえた「横浜・川崎平和のための戦争展」は10月12、13日の秋日和の2日間、慶應義塾日吉キャンパスの来往舎を会場に開かれました。テーマを「日吉台地下壕・登戸研究所を国登録文化財に」とし、どのようにすれば、戦蹟を破壊から守り、活用するための方策を見つけることができるのか、という視点から取り組みました。ご存知のように、今春、民有地にある航空本部などの地下壕出入口や遺構が宅地開発により破壊されコンクリートの奥に塗りこめられました。皆の知恵と知識をあつめて、これ

目 次	
第21回横浜・川崎平和のための戦争展(亀岡敦子)	1p~2p
基調報告 菊池実氏(小山信雄)	2~4p
シンポジウム報告・討論	
山田譲氏・森田忠正氏・渡辺賢二氏(小山信雄)	4~5p
若者の発表	
池田直人さん・清水勇希さん・田中智大さん	
法政二高歴史研究部のみなさん (遠藤美幸)	5p~8p
記念講演 綿井健陽氏	
映画「リトルバード」を観て(山田淑子)	8p~9p
映画「リトルバード」を観て(小山信雄)	9p~10p
投稿 横浜・川崎平和のための戦争展シンポジウムに参加して	
阿部正三氏	10p~11p
お知らせ 第8期ガイド養成講座 2014	11p
資料 第7期ガイド養成講座第4回 茂呂秀宏	12p~13p
連載 日吉第一校舎ノート(その1) 阿久沢武史	14p
日吉海軍こぼれ話(その1) 山田譲	15p
ガイド養成講座を受けて 梶間谷允	15p~16p
活動の記録	16p

に上りながら、日吉台地下壕の写真パネル、実物資料、学徒出陣の記録と、川崎市中原区の空襲と戦災の記録をみて、登戸研究所の風船爆弾などの実態を知ることができます。「市民の描いた戦争の記憶」絵の前には、いつもじっと見入る人の姿があります。

また、もうひとつの会場であるシンポジウムスペースでは、12日午後、大西章代表の開会の挨拶と、初参加「おと絵がたり」の皆さんのパソコンを使っての大紙芝居、

「中原今昔かみしばい」で戦争展がはじまりました。恒例の「若者の発表」では、高校生1組と大学生2組、そして大学院生1組の発表があり、いずれも自分の身近なテーマについての優れた研究で、将来楽しみです。

13日午前は、「日吉台地下壕・登戸研究所を国の登録文化財に」というテーマでシンポジウムが行われ、戦跡考古学の第一人者菊池実氏の基調報告に続いて、日吉と登戸の未来を語り合いました。午後は、フリージャーナリストの綿井健陽氏監督のドキュメンタリー映画「Little Birds イラク戦火の家族たち」が上映され、続いて氏による記念講演「開戦から10年 イラク戦争と日本」が行われ、時間いっぱい活発な質問がなされました。現在まだ解決していないイラク戦争を通して、戦争は決して過去のものにはならず、その影響は途切れることなく、世界各地の土地と人の心に潜み、いつ噴出するかもしれない危うさを抱えている事を、思い知らされました。

会場が慶應日吉キャンパスにあるということは、会場確保が困難ないま、大変有難いのですが、人通りは多くなく、参加者は決して多いとはいえない。今年も150人くらいかと思われます。しかし、展示を見る方々はみな熱心ですし、シンポジウムスペースも50人以上の参加者があります。「継続はチカラ」を信じて、来年は「戦争遺跡保存全国シンポジウム」を明治大学生田校舎で開催し、第22回川崎・横浜平和のための戦争展も兼ねるような、有意義なものにしたいと考えています。



川崎・中原・港北区の空襲被災図



「中原今昔かみしばい」 おと絵がたり

また、今年も内容的に大変豊かなものとなりましたが、多くの皆さまから賛助金を寄せていただいたおかげです。実行委員一同、心より感謝申し上げます。私たちも辛抱強く活動いたしますので、今後とも、どうぞよろしくお願ひいたします。

☆シンポジウム「日吉台地下壕・登戸研究所を国の登録文化財に」

小山信雄(運営委員)

◇基調報告 菊池実氏 (群馬県埋蔵文化財調査事業団主席専門員)

1. 戦争遺跡取扱いの過去と現在 (①~③: 研究者の動き、④~⑩: 行政の動き)

- ① 1970年代から全国各地で戦争展の開催と戦争体験、戦争遺跡の掘り起し始まる。
- ② 1997年に「戦争遺跡保存全国ネットワーク」発足し、翌年「戦争・戦跡の考古学」が学会で取上げられる。
- ③ 2003年の「世界考古学会議」にて、冷戦時代の遺跡までが考古学研究のテーマに。
- ④ 1990年、全国に先駆け「南風原陸軍病院壕(沖縄)」を文化財指定。
- ⑤ 1995年、基準一部改正 ⇒ 広島原爆ドームは国の史跡に。
- ⑥ 1996年から「文化庁記念物課」は「検討会」設置、「実施要項」定め、全国調査開始。11分野に区分し、戦争遺跡は「第9分野 政治、軍事に関する遺跡」に。
- ⑦ 1998年には、43都道府県から544件の戦争遺跡が報告され、50件が詳細調査の対象に。同年「埋蔵文化財」の遺跡の範囲が示されるも、文化庁通知と矛盾生じる。
- ⑧ 2002~05年、「松代大本営予定地壕」「日吉台地下壕」等が詳細に現地調査された。06年度に「第9分野」公表予定だったが、2013.10段階でも刊行されず。
- ⑨ 2004年の文化財保護法改正で登録文化財の対象に「記念物」が加わり、上部構造の無い「遺構や地下壕」も登録記念物(史跡)として緩い届け出制の網で保存可に。
- ⑩ 2013.7現在、「戦争遺跡に関する指定・登録文化財」は、全国で200件。



菊池実氏

2. 戦争遺跡が関係する文化財の種類:「有形文化財」「記念物」及び「埋蔵文化財」。

3. 近代遺跡としての戦争遺跡—「戦争遺跡」か「軍事遺跡」か

- ・取り扱う時代の範囲: 幕末・開国頃(或いは1869年) ~ アジア太平洋戦争終結頃。
- ・西南戦争(1877年)の遺跡を除くと国内には戦場の遺跡はない(敗戦前の前線銃後溶解時に集中)。戦争の全体像理解の為には、「海外の戦争遺跡」という観点も必要。
- ・「戦争遺跡」は戦場に限らず、全ての関連する工廠跡等の遺跡が主体となり「軍事遺跡」と呼称すべきとの意見もあるが、これでは「罹災した非軍事施設(沖縄、空襲・戦災跡)」「強制労働の場となった地下工場跡」「国民に玉砕を強いる本土決戦用陣地跡」等に対する視点が欠落する。戦争遺跡をどう捉え何を学ぶのか、その意味が問われている。

4. 「近代化遺産」と「近代の遺跡」調査

- ・「近代化遺産」:「文化庁建造物課」が「近代的手法で作られた建造物で、産業・交通・土木に関わるもの」を調査報告。総計979件の内、戦争遺跡は16件のみ(旧陸軍岩鼻火薬製造所施設など)。建築史的、土木史的、技術史的観点に重点を置く。
- ・「近代の遺跡」:「文化庁記念物課」の全国調査では、軍事以外の分野でも戦争遺跡が調査対象となった(軍需工場跡/重工業、飛行場跡/交通運輸通信業、学校奉安殿/文化等)。
- ・我が国の近代におけるあらゆる分野の遺跡を対象とする⇒「田原坂」も調査対象。
- ・「原爆ドーム」は建築史的には調査対象にならないが、歴史的観点から調査対象とする。
- ・先行する「近代化遺産」と調査の重複を避け、多くが戦災受け「埋蔵文化財」となってしまったケースが多い為、報告数は544件のみ。内、詳細調査の対象として、50件が選定された(戦災・戦闘経過が認められない残存状態の良い建造物が対象)。

5. 遺跡の取り扱い問題

- ・近代遺跡（戦争遺跡含）の調査例は全国的にも少なく調査対象外のケースも多かった。
- ・1998年「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」の文化庁通知出されたが、内容は埋蔵文化財のレベルダウンを図ったものに・・・⇒「開発に伴う事前調査で、発掘調査対象を原則的に中世（16世紀）迄とし、近世以降は例外を除き調査対象としなくても可」と解釈されるような内容。
- ・「近代化遺産」リストは建造物主体で、埋蔵文化財としての認識が甚だ乏しい。
- ・戦争遺跡の発掘調査は、研究者としての行政担当者の学問的関心や良心に基づいている。
- ・古い時代の遺跡調査が優先され、近現代の遺跡は、過去ほとんど調査されず。

6. 文化庁の近代遺跡の保護に関する取組について

- ・2012年度中、刊行見込みの「近代遺跡調査報告書(9)政治・軍事」は未実現だが、「文化庁文化財部記念物課」から提言あり⇒「近代の遺跡について、近世迄のものと比べ保護が不充分。一層の進展が重要。近代遺跡の指定や登録にむけ調査研究進める事が適切」
- ・各自治体では、国の様子見でなく積極的な取り組みが求められている。

7. 課題

- ① 戦争の記憶継承と戦争遺跡の保存目的の明確化
- ② 戦争遺跡の調査研究と保存・普及、文化財指定・登録の推進
- ③ ダークツーリズム（沖縄の戦跡や広島原爆ドームへの修学旅行等）としての活用

8. 感想

戦争遺跡を登録文化財にする為の関係者の過去の努力や、行政の対応の経緯などを知り、その容易ならざる実態を認識すると共に、何にも増して、現場からの強い発信が大切であると感じました。その為にも地道なガイド活動の継続や戦争展などの開催により、戦争遺跡の保存の大切さを広く知って貰い、一人でも多くの市民の理解を得て、県や国を動かせる力（地域の声）が結集出来る事に繋げられるよう、努力して行きたいと思います。

★シンポジウム 報告・討論

小山信雄（運営委委員）

◆日吉の戦争遺跡の保存と活用－私が思うこと（日吉台地下壕保存の会 山田謙氏）

（1）日吉台海軍航空本部等地下壕東側出入口の現状

- ・宅地開発業者による地下壕出入口の破壊を招いてしまった事は手痛い失敗ではあったが、今後の保存運動が直面している大きな課題が投げかけられた。一方、従来確認しきれていた出入口の位置などの再確認も出来た。
- ・横浜市は県と協議の上、近日中に日吉台地下壕群を「周知の埋蔵文化財包蔵地」に指定の予定。この場合、教育委員会の現場確認、文化財の重要性判断の上で「開発許可の判断」が行われる事となり、一歩前進ではあるが、完全に破壊が中止される訳ではない。

（2）今回の宅地開発工事の経過と私たちの取り組み

- ・10年間マンション建設工事は中断されていたが、今年3月に突如工事再開され、航空本部出入口等遺構の一部が破壊された。法的に工事中止させる権限ない中で、これ以上の破壊が進まないよう工事の監視活動継続し、同時に横浜市、慶應義塾に対し、日吉台地下壕群を文化財にする働き掛けを推進中。
- ・保存の会の活動内容：マスコミへの連絡、地元選出の横浜市会議員・地元自治体への働き掛け、慶應義塾との連携、署名運動の協力、反対の意思表示看板の作製など。

（3）日吉の戦争遺跡との私の出会い

- ・ガイド始める切っ掛け、理由は人さまざま。興味を持つことが重要。
- ・「活用」されてこそ「保存」の意義が生まれる。「活用」とは、その戦争遺跡を案内し説明、想像し考えてもらう。活用する人、抜きには「保存」は生きない。アジア太平洋戦争の記憶

を如何に継承し、新たな戦争を阻止する大衆的な力を今日的につくりだすのか。平和運動の担い手を少しでも増やし、関心を広げて行く。

(4) 今後の課題

- ・破壊の再発を防ぐ為、日吉台地下壕保存の会としての取組みに留まらず、外に開かれた形で如何に進めて行くべきか ⇒足立造園さんの敷地内出入口、人事局地下壕等。
- ・「周知の埋蔵文化財包蔵地」等の指定を受け、簡単に破壊されないような取組。
- ・「近代遺跡として貴重なものと認める」としながら、保存に関し、国も地方自治体も、双方受け身の姿勢を崩さない。こうした行政側の無責任な姿勢を改めさせるべく、継続的な運動を全国的な規模でやる必要がある。

◆「日吉台地下壕・登戸研究所を国の登録文化財に」(登戸研究所保存の会 森田忠正氏)

(1) 登戸研究所とは(「加害の歴史」を伝える戦争遺跡)

- ・戦時中、多摩区生田の明治大学生田キャンパスを含む11万坪の広大な敷地に、風船爆弾・電波兵器・細菌・生物化学兵器・にせ札等「秘密戦」を担った陸軍技術研究所があった。

(2) 戦争遺跡 登戸研究所の保存と活用のとりくみ

- ・2006.10、にせ札を印刷・保管した木造建物の保存を求めて会が結成された。建物は川崎市や明治大学に陳情、要請を繰り返したが、2011.2に解体されてしまった。
- ・2010.3、明治大学は鉄筋コンクリート建物をそのまま保存し、「明治大学平和教育登戸研究所資料館」を開館し、既に28,000人の見学者あり。最近は中高生の見学者も多い。

(3) 保存の会の活動—神奈川新聞の社説(2010年4月25日)から

- ・「保存に向けた市民団体の活動も精力的であった。こうした取組みがなければ、人知れず存在は忘れ去られた可能性すらある」と保存と活用の運動が高く評価された。

(4) 最近の行政とのかかわり

- ・本年、多摩区役所地域振興課の要請により「新たな観光協会」への会員登録を申請。これまでの行政の諸会合等への積極的な関わりが評価され、「多摩区ガイドブック」等にも紹介されるようになり、今では行政、市民団体からも信頼される会となっている。

(5) 登戸研究所遺跡を「国の登録文化財に」

- ・2012.12、再スタート時の会則の目的を定め、活動している。
⇒「登戸研究所遺跡を国の登録文化財に指定する運動。地域の貴重な文化財・平和のための史跡として保存・活用の運動。体験者や経験者への聞き取り、調査・研究。登戸研究所遺跡の意義を市民に広め、若い世代に語り継ぐ活動をすすめる」

(6) 明治大学平和教育登戸研究所資料館と協力して

- ・共同した資料収集、聞き取り、定期協議の場設置、ガイド養成講座の共同開催の計画等、「会」との協力関係は一層進展。キャンパス内戦争遺跡への説明板設置の要請も実現。

(7) 平和のための文化財「登戸研究所」を、広く市民や子どもたちに伝えて行く

- ・川崎市は全国に先がけ「核兵器廃絶平和都市宣言」を行った。この経験生かし、多くの市民や子どもたちに伝えて行きたい。
- ・戦争中、軍国主義教育を受けた生徒は何の疑いもなく軍隊に行くことを望み、お国の為に死ぬことを信じた。登戸研究所で働いた研究者も然り。川崎市多摩区内の神社仏閣の忠魂碑や戦没慰靈碑には、多くの戦争犠牲者の名前が刻まれている。ここにまた新たな犠牲者の名前を刻むことのないように、戦争遺跡の保存と活用を進めて行きたい。

◆感想

- ・戦争中の軍国主義教育を、当時の学生達は、どのように受け止めていたのであろうか。今では想像を絶するような強大な圧力とか空気があった事は間違いないと思うが、学生達の悩みもそれぞれ深いものがあったはずであり、決断を強いられた事と思う。当時の状況の中で人々はどう思い、どう感じていたのか。当事者の気持ちとなって、見学者に想像し、考えてもらえるようなガイドを目指してゆきたい。また、登戸研究所資料館のような施設が一日も早く、日吉にも開館出来るよう願ってやみません。

★若者の発表「戦争の記憶をひきつぐ」

遠藤美幸(運営委員)

「横浜・川崎平和のための戦争展」の目玉のひとつに、「若者の発表」があります。今年は、4組もの若者たちが「戦争の記憶をひきつぐ」という現代的なテーマについて、若い視点で掘り下げた興味深い発表がありました。以下、各発表の概要について報告します。

(1) 横須賀航空隊 知られざる過去帳(池田直人さん 貝山地下壕保存する会)

報告者の池田直人さんは、中学生の頃から地元の横須賀や三浦の戦争遺跡に興味をもつようになりました。この辺は旧海軍航空技術廠跡がある戦跡が豊富な地域です。とくに追浜地域は最新鋭の航空技術の研究開発の拠点であり、当時の遺構が残されており、貝山地下壕保存する会の方々の保存を求める活動が行われています。池田さんは、高校生の時に貝山地下壕保存する会に参加し、戦跡研究や保存活動を行ってきました。

2012年8月15日、テレビ神奈川が、横須賀市浦郷町の正觀寺に、「旧日本軍横須賀航空隊の殉職した兵士の名が記載された過去帳が保管されている」という内容の番組を放映しました。戦時に、現住職の祖父にあたる当時の住職が、航空隊の格納庫でいとなまれた葬儀に出席した際、戦死した147名の航空隊の兵士の名を、密かに寺の「過去帳」に記録していました。その過去帳には、試作機の試験飛行や訓練中に墜落死した航空兵だけでなく整備士、兵器職手、実験工手、士官などの名前も記載されました。

後日、池田さんを含む貝山地下壕保存する会の方々は、正觀寺を訪問して過去帳を見せて頂いたそうです。正觀寺には当時の兵士らの多くの遺影が今も掲げられています。私たちも映像でその軍服姿の若き遺影を見ることができました。過去帳に記された彼らの階級、名前とともに、若い命が失われた事実を目の当たりにして、戦争の悲惨さを現実のものと感じることができました。

池田さんたちの貝山地下壕保存する会の取り組みは、地域に残された戦争の実相を物語る一次史料の発掘や究明を行うことで、より史実に近い戦争の現実に近づくことを可能とし、物言わぬ戦争遺跡に重要な意味づけを行いました。今後のさらなる史実の究明を期待しています。

(2) 山梨県上野原市西原戦跡～監視哨および聴音壕の考古学調査～

清水勇希さん(山梨学院大学考古学研究会)



清水勇希さん

2012年末から2013年2月にかけて、山梨学院大学考古学研究会と山梨戦争遺跡ネットワークの合同で、西原地区の戦跡である監視哨と聴音壕の考古学的調査が行われました。

聴音壕の中では、人間の聴力によって、上空を飛来するB29などの米軍機のエンジン音を聞き分けて、事前に空襲などの危険を知らせていました。この任務は24時間体制で実施されました。

今回の調査の前に、元西原中学校の岡部平和校長による監視哨と聴音壕の聞き取り調査が行われており、その内容を検証することが合同調査の目的でした。調査内容は以下の通りです。

(1) 監視哨の調査

周辺の測量調査で、聴音壕より南方方向に平坦な面があり、そこから哨舎の位置を推定したが、確証となる礎石などの遺構は確認できず、哨舎推定位置の北側周辺に、茶碗・湯呑・皿などの遺物が散布。

(2) 聽音壕の調査

測量調査より直径4.6m、深さ1.7m、標高約572mの遺構が確認され、実測調査の検討より六角形であったことが確認。この聴音壕は、職人の石工ではなく、おそらく素人が構築した壕であると推定。

このような遺構の周辺に、統制番号が記された当時の統制陶器や国民食器と呼ばれた茶碗や皿などが数多く散在しているようです。当時は哨舎内に生活用具を置いていたので、今回の

の調査で採集した陶器類はその生活用具だと考えられています。

大学の研究グループが積極的に戦跡の調査、研究に協力することで、戦跡の学問的裏付けが強化され、戦跡の保存活動の社会的認知につながることが、今回の報告で改めて認識できました。

(3) 四国の戦争遺跡保存の取り組みについて—戦争遺跡保存四国シンポジウム4年の活動を俯瞰する— (田中智大さん 明治大学大学院 博士前期課程1年)

報告者の田中さんは、広島県呉の生まれです。今年の4月に、明治大学大学院の博士課程に進学し、十五年戦争期の海軍と政治の関係をテーマに研究されています。

今回の報告では、四国の戦争遺跡保存（以下戦跡保存）の現状報告からその特徴と問題点を明らかにして、戦跡活動の取り組みがもつ本質的な課題を提示し、今後の諸活動の指針を提言されました。

四国には、日清・日露戦争から第一次世界大戦、アジア太平洋戦争にかけての多様な戦争遺跡があります。以下が今回紹介された四国四県の主要な戦跡です。

- ① 香川県…善通寺陸軍第11師団の関連施設（偕行社跡、師団司令部跡など）
- ② 徳島県…坂東俘虜収容所跡、小勝第22突撃基地跡
- ③ 高知県…高知海軍航空隊の前浜掩体壕群・四国防衛軍トーチカ、琴平山陣地跡、海軍航空隊宿毛基地跡
- ④ 愛媛県…松山海軍航空隊基地跡、小島砲台跡、八幡浜第一防空壕など

田中さんの報告によれば、2010年より、四国四県で最も戦跡保存の取り組みが活発な高知県の「戦争遺跡保存ネットワーク高知」が中心になり、市町村、都道府県枠を超えた「四国」という地域で戦跡を保存しようとする活動が展開されています。これは全国的にみても画期的な活動であり、「四国」の戦跡保存活動の特徴の一つです。

一方で「四国」が直面している以下のような課題があります。

- ① 各県レベルでの活動主体の欠如②調査研究の遅れ③思想的忌避感や認識のズレ④若い世代の獲得が難しいなどの課題が挙げられます。

田中さんが最後に指摘されたように、「四国」の戦跡保存活動の現状が提示している特徴や課題が、私たち日吉台地下壕保存の会の保存活動にも相通じる問題であると思いました。なかでも、より若い層に戦跡保存活動に関心や興味をもってもらえるような取り組みが急務であり、その意味で大学キャンパス内にある日吉台地下壕は、若い層への啓発には最適な戦跡であると改めて思いました。



田中智大さん

(4) 「馬人共生～人と馬が歩んだ軌跡～ (法政大学第二高等学校歴史研究部の皆さん)

高校生の発表は、元気な自己紹介から始まりました。馬の視点から歴史や平和を考えた着眼点がユニークな報告でした。

最初に、日本の在来馬の紹介がありました。日本の在来馬は8種あり、原産はモンゴルで、その特徴はぐんぐんとした温厚な性格だそうです。文明開化とともに、欧米からサラブレッドが入ってきました。足の長い端正な姿のサラブレッドの導入により近代日本競馬が始まりました。かつて、登戸に競馬場があったことをはじめて知りました。

その後、馬と人間の関係は「馬事思想」の普及により、人々の暮らしの中に深く入り込ん



法政大学第二高等学校歴史研究部

できました。戦時期になると、「ものいわぬ兵士」として馬も兵士とともに戦地へ送られていきます。1939年4月7日を「軍馬の日」と定め、国内では「愛馬進軍歌」が歌われ、国民生活の中に「軍馬信仰」が漸次的に浸透していました。一方で、死んだ馬の供養として戦没軍馬の供養が各地で行われました。

以前、私はある騎兵隊の将校が「愛馬を失った悲しみは、戦友の死となんら代わりはない」と語っていたことを思い出しました。日中戦争において「軍馬」は主に軍事物資の輸送に活躍しましたが、それ以外にも多くの「軍馬」が、戦闘だけでなく飢えや傷病で無残に死んでいきました。馬は「ものいわぬ兵士」であったのです。

今回の報告により、馬と人間の関係は、まさに「馬人共生」であり、平時、戦時と問わず密接な関係にあったことがわかりました。高校生の皆さんには、私が使いこなせない「パワーポイント」を巧みに使いこなし、大変分かりやすい報告でした。この先が本当に楽しみな若者たちでした。

★記念講演 「開戦から10年イラク戦争と日本」 綿井健陽氏

◎映画「Little Birds イラク戦火の家族たち」を観て・講演を聞いて
～イラク戦争、その戦後、平和のための戦争展との関係で～

山田淑子(運営委員)

・イラク戦争

映画「Little Birds」は、2003年3月イラク戦争開戦から1年半の間を映像取材によって制作されたものである。前日まで普段と変わらない日常生活を営んでいたイラク市民が、空爆の開始によりその時点から日常生活が奪われ、戦争という非日常に生活そのものが投げ込まれてしまう。戦争というのは、昨日と違う今日が始まるということが映像を通じてより生々しいものとして伝わってきた。空爆、銃撃等で多くのイラク市民の命が奪われ、また負傷した現実が映し出されている。特にバクダッド陥落後、住宅地の空き地に多く散乱しているクラスター爆弾の不発弾を知らないでさわった男の子の手が吹き飛ばされたことは、子供たちが遊ぶ身近な場所に無差別破壊兵器がころがっている。これが戦争の現実であることを明らかにしていると思った。大量破壊兵器がなかったという、根拠のない戦争が人間を破壊し、社会を破壊した戦争であることを映像が訴えている。綿井氏が米兵に「大量破壊兵器はどこにあったのか」と詰め寄る熱い取材がすべてを物語っているように感じた。

・その戦後

この映像取材から6年ぶりにイラクの戦後を取材した綿井氏は、若者は日本とかわらずスマホを持ち、酒屋も復活し、シリアとイラクのサッカーの親善試合なども行われ、小学校の授業も平常に戻り、子供たちの間ではゲーム機による戦争ゲームが流行し、一見普通の日常生活に戻ったかのような報告もあった。しかしながら、劣化ウラン弾で白血病になった人々への日本のNGOによる医薬品等の提供支援が続けられていたり、内戦や宗派間闘争により多くの人たちが殺害され(2006～2007年では



講演 綿井健陽氏

1日100遺体がバクダッド中央遺体安置所に運ばれている)、イラク社会が本当に平和な状態を取り戻しているのか。イラク戦争、その後の内戦などで多くのイラクの人々は、家族、親族の誰か1人が亡くなり、その数は11～12万人であると。それに比して米軍兵士の死者は4,486人。

このようにイラクは不安定な現状で、車が頻繁に爆発し、いつどこで誰が狙われるかわか



綿井健陽氏

らない。バスターミナル、モスクなど人が多く集まる場所も標的にされ、一見平和が戻ったように見えても社会は破壊され、人々は深い深い傷を負って生きている。私の中で遠くなってしまったイラク戦争を10年の年月を経て見直し、考え直さなければならない。地下壕保存の会のガイドの私が戦争をどのように実感し伝えていくのか問われていると思った。

・平和のための戦争展との関係で

綿井氏は、「Little Birds」を2005年に沖縄国際大学で上映した時、主催側から外の音と一緒に上映してみたらどうかという提案があったそうだ。沖国大といえば米軍のイラク派遣訓練中に墜落事故があったところだが、

「外の音と映画の音が一緒だったことに驚いた」と話された。在日米軍基地がなければイラク戦争はありえないと実感されたようだ。また、上映会等で全国をまわると日本は米軍基地と原発に覆われていると思われたそうだ。私も同感である。このように私たちは知らず知らずのうちに加害の側に立っているのである。

綿井氏は、「Little Birds」を殺される側から見た戦争を意識し、加害の記録として制作したと話された。また、この映画を多くの人々に見てほしいがその上映場所が少なくなっているとの話。加害の記録、加害に関する展示に対してひどい抗議がされるようになり、場所を管理する側が安全、警備を理由に拒否するようになってきている現状があり、これに対抗する側の力が弱くなっているそうだ。私たちが行ってきた「横浜・川崎平和のための戦争展」は第21回をむかえて内容もさらに充実してきたように思えるが、次世代を担う若い人たちへの働きかけがなかなかできていないように思われる。大学の構内で行っているにもかかわらず、学生の関心を十分に引きつけることができていない。社会状況は、憲法改悪、集団的自衛権、秘密保護法と大きく舵が切られようとしているこのときに、若い人に「戦争とは何か、平和のためには何をするべきか」を知ってもらい、そのすそ野を広げていくことが、発表、展示、上映の場と機会を確保することにつながっていくのだと思った。

◎映画「Little Birds イラク戦火の家族たち」を観て

小山信雄(運営委員)

この100分あまりのドキュメンタリー映画は、とても衝撃的でした。ジャーナリストの綿井健陽氏が、戦争開始の前から現地入りし、英米軍の攻撃開始からバグダッド陥落後の現地の様子を1年ほど掛けて撮り続けた映像と音声の作品であり、「被害を受けたイラクの人々の生の声」を知り、「戦争」の実態をさまざまと知らされた思いで一杯です。

平和で活気あふれるバグダッドの街中から映画は始まりました。街頭TVやレストランで食事を楽しむ人々、空き地でサッカーを楽しむ親子など。しかし、開戦2日前(2003.3.12)になると様子は一変。店主たちはシャッターを閉め、街はあっという間にゴーストタウンの様に。そして、間もなくイラク戦争は始まり、連日の空爆により、小さな子どもを含む大勢の、戦争と全く無関係の人々までが犠牲となりました。

3週間ほどでイラク全土を制圧した米軍の戦車隊がバグダッド市内に乗り込んで来た時、冷ややかな市民達の中で、たった一人で米兵達に叫びかける女性が現れました。「戦車の中に隠れている卑怯者達！あなた達は何人の子ども達を殺したんだ！今すぐ病院に行って、お前たちが殺した子ども達を見て来い！」。米兵たちは薄ら笑いを浮かべながら黙殺するのみ。「ヤンキー・ゴー・ホーム」を叫ぶデモ隊に対しては、逮捕、銃の乱射による対応。

市内の病院の中は負傷者で溢れかえり、医師も薬も極度に不足する中、命を落としてゆく人々が続出。「私たちが何をしたというのだ！こんな所に爆弾を落として何になる！俺たちを殺して何になる！」、「アメリカはイラクを奪いに来た！イラクの石油を奪いに来た！」、「ゲーム・イズ・オーバー。只の泥棒だ、早く出て行ってくれ！」「アメリカは人権を守る国とい

うが、これは一体どういう事だ！」等様々な声が。空爆被害者への補償を行う施設も出来たものの、対応はお座なりで真摯な対応には程遠く、文句を言えば、あろうことか担当者は「戦争被害を補償するシステムがない。裏付け証拠収集が主目的。対応すべき市民が余りにも多すぎる」と言うあります。綿井氏の米兵に対する問い合わせ「化学兵器はどこにあるんだ？」「この戦争の理由は何だ？」に對しては、「イラク解放の為」の一点張りで、返答に窮すると「ノーコメント」を繰り返すのみ。



書籍紹介 リトルバーズ 綿井健陽著 晶文社 1600円

投稿

「横浜・川崎平和のための戦争展シンポジウム」に参加して

リトルバーズの会会長 阿部 正三

町田市に住んで市民の自主的な学習活動に参加して学んでいますが、同じ学習仲間で日吉台地下壕保存の会で活動されている谷藤さんに誘われてやってきました。私たちのグループも「戦争と平和について考える」というテーマで学習していますので、戦争遺跡保存運動を進めておられる皆様のご努力には敬意をもって見守ってきました。今回のシンポジウムでも戦争遺跡の保存に及び腰の国や自治体の現状をお聞きして考えさせられました。

戦争遺跡保存には対立する二つの側面があります。一つは、かつての大日本帝国が軍国主義国家として周辺諸国を侵略した歴史を批判的に捉え、その実態を負の遺産として後世に伝え続けようとするもので、太平洋戦争最後の激戦地沖縄の戦跡や原爆投下地広島や長崎などは典型的な戦争遺跡といえるでしょう。その沖縄であっても、戦争遺跡の保存は適切ではありません。今年の冬、沖縄の戦跡を巡っていましたが、「旧日本軍第32軍司令部壕」の説明板の内容が、県が委嘱した専門家による説明文の一部を削除（沖縄県による）して作成されていることが分かり問題となつたそうです。又、島内の南端にある平和祈念資料館の展示内容が日本軍の住民虐殺や残虐性を薄めるために18項目に亘って変更されたことを知りました。資料館は個性的な立派な建物でしたが、展示品については、沖縄戦の実相を知るための展示としては控え目な感じで、戦争を体験した沖縄の人々にとって歯がゆい思いをしているのではないかと推察しました。また、館内には説明者の姿はなく、集団で来館した高校生の見学者が右往左往していました。戦争を知らない世代の人たちに戦争の真実の姿を理解させるのは大変なことです。館内の係員の話では、当館には学芸員はいらず、ボランティアに頼っているそうですが、そのボランティアも老齢化して集めにくいのが実情だと言っています。

他の一つは、明治維新以来日本が関わった戦争を、かつて欧米列強がアジア諸国に対して行った帝国主義的植民地戦争と同様に国際社会において是認された戦争であったとし、アジア・太平洋戦争についても、大東亜共栄圏を目指した大義名分のある国威発揚のための戦争であり、日本のアジア進出を警戒する欧米列強に対する自衛戦争ということになり、戦争行為を積極的に擁護する考え方です。この考え方方に立てば、戦争遺跡は国家のために命を懸け

て戦った勇士たちを讃える場所となります。

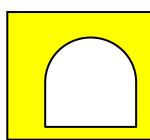
このように、同じ戦争遺跡でも、見る人の歴史観が違うと、まったく違った意味にとられてしまいます。戦争遺跡保存運動の難しさは、見る人の歴史観にどこまで入り込んでいけるのかということにあるのではないでしょうか。

かつて日本帝国が侵略した中国や韓国では徹底的な歴史教育が行われています。中国人民抗日戦争記念館(北京)、南京大虐殺記念館(南京)、韓国独立記念館(忠清南道)などを見学した日本人は加害国の人間としてとても複雑な気分になり、黙り込んで館を出るそうです。

7年ぶりに綿井健陽監督の名作「Little Birds」を再度鑑賞しました。現代の「戦争とは何か」という問題に真正面から取り組んだこの作品から、眞実の重みに圧倒された鮮烈な想い出が甦ってきました。私たちのグループはこの映画の自主上映を契機に結成されたグループですが、眞実を求めてたじろがずに向かっていく姿勢は大事に持ち続けたいと願っています。

募集

一緒にやりませんか



第8期 日吉の戦争遺跡ガイド養成講座 2014

～戦争遺跡を歩いて平和の語り部になろう～

毎年2000名余りの見学者が訪れる戦争の遺跡・日吉台地下壕のボランティアガイド養成の実践講座です。戦争遺跡を保存するだけでなく、二度と悲惨な戦争をくりかえさないために活用していくにはガイド活動が不可欠です。物言わぬ遺跡にガイドの案内を加えて歴史を語ってもらいます。この活動をいっしょにやってみませんか？

◎第1回 1月18日(土) 慶應大学日吉キャンパス 来往舎中会議室 13時～15時半
《ガイド活動の概要》 日吉台地下壕・日吉台地下壕保存の会の活動について

○地下壕見学会 1月25日(土) 日吉駅集合 13時～15時半

(保存の会が毎月行っている定例見学会に実習体験として参加していただきます。)

◎第2回 2月8日(土) 来往舎中会議室 13時～15時半

《体験者の話を聞く》 元暗号兵・理事生・寮生など

○地下壕見学会 2月22日(土) ガイドの補佐 日吉駅集合 13時～15時半

◎第3回 3月8日(土) 来往舎中会議室 13時～15時半

《ガイド活動の実際》 ガイドのポイント・用語解説・見学会の実際

○地下壕見学会 3月22日(土) ガイドの補佐 日吉駅集合 13時～15時半

◎第4回 4月12日(土) 来往舎前集合 10時～12時・昼食後 13時～15時半

《フィールドワーク》 日吉駅西側艦政本部周辺・日吉キャンパス地下壕周辺

○地下壕見学会 4月26日(土) ガイドの補佐 日吉駅集合 13時～15時半

◎第5回 5月10日(土) 来往舎大会議室 13時～15時半

《まとめ》 小中高校生向けのガイドの実際・フリーディスカッション・修了証授与

定員 30名(高校生以上) 参加費 2000円(全5回分) 見学会は各回300円(保険料)

申込先 ハガキ又はFAXで、①住所 ②氏名 ③年齢 ④電話番号をご記入の上、

下記「ガイド養成講座」係へお申し込みください。〆切は1月15日(水)です。

〒223-0064 横浜市港北区下田町2-1-33 喜田方「ガイド養成講座係」

Tel&Fax 045-562-0443(午前・夜間)

主催 日吉台地下壕保存の会

後援 横浜市港北区役所

第7期ガイド養成講座第4回提起文書

茂呂秀宏(運営委員)

本土決戦が回避できたのは「天皇の聖断」のおかげか

① 自由社版 育鵬社版歴史教科書における記述

自由社版歴史教科書 P210～211

「ポツダム宣言が発表されると、鈴木貫太郎首相や主要な閣僚は、・・・これを受諾する方向に傾いた。しかし、陸軍は反対し、本土決戦を主張してゆづらなかった。政府はしばらくソ連の仲介の返答を」待つことにした。その間に・・・広島・長崎・・・ソ連の対日宣戦布告・・・があり・・・9日深夜、昭和天皇の臨席のもと御前会議が開かれた。ポツダム宣言即時受諾について、意見は賛否同数になった。・・・鈴木首相が天皇の前に進み出て聖断を仰いだ。天皇はポツダム宣言の即時受諾による日本降伏を決断した。・・・」※側注に「聖断後の昭和天皇の発言」という資料が以下のように引用文として掲載されている。

「このような状態で本土決戦にのぞんでいたら、・・・日本民族はみな死んでいまわなければならぬことになるのではないかとおもう。そうなればどうして日本という国を子孫に伝えることができるのか。一人でも多くの国民に生き残ってもらって、・・・この日本を子孫に伝える他ない。・・・私はどうなってもかまわない。こういう風に考えて、戦争を即時終結することを決意した。」(迫永久常書記官長の証言より)

② 教科書では、天皇の「聖断」によりポツダム宣言を受け入れ、国民に玉音放送として流し、本土決戦を回避し、「天皇をいただく日本の国家体制」を守ったとの解釈ができる記述がなされている。

③ 教科書の記述は、戦争末期の状況を切り取り当時の狂信的なかつ強硬な本土決戦派の存在を考えると、それを抑えポツダム宣言を受諾するためには、天皇の「聖断」は必要であり、教科書の記述も正しいのかもしれないが、その記述には、戦争後期の天皇の一撃和平論によって和平交渉が回避され戦争終結が遅らされ、東京大空襲・沖縄戦・原爆投下、さらには、ソ連参戦を招き、計り知れない非戦闘員を含めた被害をもたらしたことについての責任論については全くふれられていない。

④ もしこの点に言及すると、そもそもこの戦争がなぜ起こされたのか、だれの責任でもって起こされたのかの開戦責任論、さらには、東南アジア東アジア諸国に対する侵略の事実に対する責任論に言及せざるをえなくなり、ふれることができない点なのであろう。

⑤ 日本の戦争終結の方法は、ドイツやイタリアなどの開戦の責任者が自殺したり、レジスタンスの市民によって処刑され終結するのではなく、開戦責任者自らの手で戦争終結がはかられたというものであった。

※このことが戦後七十年経過しようとしている現在においてもアジア諸国から侵略戦争の責任の追及が繰り返えされる歴史的根拠となっている。

⑥ 歴史はその時々に生きている人々の意思からかけ離れた客観的な要因によって動かされているわけではない。その時代時代に生きている人々の意思によって動かされてつくられていく。もし天皇が本土決戦を容認する立場にあったならば、本土決戦に突入していた可能性を否定することはできない危うい状況にあったことは我々はこころしておかなければならない。

もちろん、歴史は少数の権力者や為政者の意思だけで動かされているわけではない。

大衆の同意がなければ、権力を行使することはできない。権力者の意思も大衆の考えにおおいに影響されてくる。ポツダム宣言うけいれの政治判断も、日米の軍事力の判断以上に、当時の国民内に醸成されてきた厭戦気分や反戦的言動にも影響されていたことは否定できないだろう。

- ※家永三郎の「太平洋戦争」参照 戦争末期の国民の厭戦・反戦意識の実証的研究
- ⑦ もちろん大衆の意思といつても、時の為政者の都合の良い事実だけ切りとったマスコミなどの報道による世論操作の結果であるといえなくない。
- ⑧ 一方、そのような世論操作を批判し、人民大衆の側にたった情報提供をおこないつつ、時の為政者が提示する歴史選択とは異なる選択をし提示した人々も多く存在してきたが、その多くは時の権力者の弾圧にあい抹殺されたり、弾圧に屈したり論争に敗れたりして、自らの意思を変え、権力者の意思を代弁するものに変節していった主体も多数存在してきた。人民大衆自らの名によって歴史から抹殺されてきたことも少なからず存在してきた。
- ⑨ 私たちが今なさなくてはならないことは、アジア太平洋戦争を回避する歴史的選択肢がどうあったのか、またそれがなぜ選択されなかつたのか、選択するためには何がなされる必要があつたのかという観点から、アジア太平洋戦争の歴史的総括をなし、教訓化し、それを現代の政治的・社会的な歴史選択において教訓化していくことである。その結果、侵略戦争にいたる歴史的選択を批判し別の選択を提示できる主体の育成をはかり、また、不幸にして選択されてしまったそのような道に対して異議申立てをし、軌道修正を要求できる主体育成を図っていくことである。
- ⑩ アジア太平洋戦争回避のためのもうひとつの選択肢模索のために上記の観点からの日本近現代史研究 大国ないし領土拡大志向の強い資本主義国家ではなく、小国志向ないし国際協調志向の強い国家構想の選択がありえた。

例示

- ・幕末・・・共和国的国家論にいきつく可能性を秘めた西周の近代国家構想 幕府主導の近代化の可能性はあった。鳥羽伏見の戦いから五稜郭の戦いまでの戊辰戦争のみなおし。(奥州越列藩同盟の構想、箱館共和国構想)
- ・自由民権運動 特に国民民権運動(典型が自由自治元年という概念までいきついた秩父事件)
- ・甲申事変失敗後に出された脱亜論以前の福澤諭吉のアジアとの提携論の実戦と理論
- ・日露戦争における内村鑑三と謝野晶子らの反戦非戦意識の醸成できず、日比谷暴動的な屈折した民衆の反政府暴動に帰結したこと
- ・大逆事件と批判なき韓国併合 朝鮮は日本の生命線への批判の欠落
- ・大正デモクラシー期の石橋湛山の植民地放棄を訴えた小国論
- ・ワシントン軍縮会議の結果に対する犬養毅らの天皇大権を使っての浜口雄幸内閣批判が大正デモクラシーから軍部の独裁的な戦時体制移行の呼び水となったことの歴史的総括。
- ・満州事変を不景気からの脱出契機として支持する国民的意識の醸成
満州は日本の生命線という常識批判の欠如
- ・サイパン陥落以後の日本軍の士気の低下などの実証的研究の必要
敵前逃亡 兵役忌避・・・
- ・市民の意識 「贅沢は敵だ→贅沢は素敵だ」のいたずら書き
- ・軍事工場における欠勤率の上昇
- ・1945.2 近衛のソ連を通しての和平交渉構想にたいする、一撃和平論からの却下。

連載

日吉第一校舎ノート (1) はじまりの日

阿久沢 武史 (運営委員)

日吉キャンパスの第一校舎(現・慶應義塾高等学校校舎)で初めて授業が行われたのは、昭和9年(1934)5月1日のことである。この日、文・経済・法学部の予科第一学年、約千名の授業が始まった。新しい学園建設の構想のもと、三田・信濃町に続く慶應義塾三番目の

キャンパスとしての「日吉」の、記念すべきはじまりの日である。

この時、すでに陸上競技場は完成していたが、広大な敷地に点在する施設はまだ建設途上にあり、駅から校舎に向かう銀杏並木の道路工事は進んでいなかつた。雨の日は悪路に足を取られ、難渋したとのことである(小林澄兄「日吉予科一ヶ年を回顧して」『三田評論』第452号、昭和10年4月)。

日吉開校に関し、昭和9年5月の『三田評論』第441号では、「日吉台第一期校舎竣工す」と題して、次のように報告されている。

嘗ては先住民族の遺蹟として貝殻や石鏃などを掘出したあたりに、今は雪白厳然たる近世アメリカンスタイルの鉄筋コンクリート三階建、延坪三千余坪の大校舎がそそり立ち、その前面には隋円形擦鉢形のトラック・フィールド、後方低地には本試合用及び練習用のテニスコート9箇が完成し、他の運動設備も著々工事が進められている。

日吉開設に先立って、三田史学会を中心に数次にわたる発掘調査が行われ、校地およびその周辺から複数の古墳が発見・発掘された。土木工事が進むにつれて、弥生式竪穴住居跡が次々に確認され、日吉の丘の上には、かなり広範囲にわたって弥生時代の一大集落が存在していたことがわかつた。その一部は、いま寄宿舎手前のテニスコート横にコンクリートで固められて保存されている。第一校舎の建設地では、地ならし工事の際に8基の住居跡が発見され、昭和7年(1932)5月に行われた発掘調査では青石卒塔婆(板碑)8枚・舞鳳獣頭鑑一面・宋銭2個・人骨一体も発見されている(『慶應義塾百年史』中巻(後)「第二章 日吉建設」p307~310)。

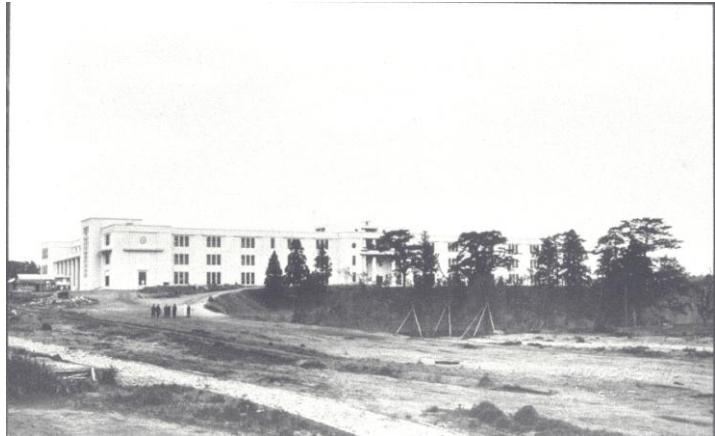
この日吉の台地では、古代より人々の生活が営まれていた。その土地の上に建てられた「雪白厳然たる近世アメリカンスタイルの鉄筋コンクリート三階建の大校舎」。古代から現代までの土地の記憶の上で、建設以来79年の時間を重ね、現在でもなお二千名を超える高校生が同じように学んでいる。「79年」という時間の蓄積は、人の一生に相当する。この校舎の、「建物」としての記憶をたどってみたい。

日吉開設の前年、昭和8年(1933)の『三田評論』10月号(第434号)「日吉建設工事の概要」では、第一校舎の建築工事の進捗状況が次のように記されている。

全計画に於ては、此處に大学予科、普通部、商工学校、大講堂及び寄宿舎を建設し、これに加ふるに体育の諸設備を遺憾ながらしめ、此の至良の環境の裡に理想的一大学園を建設しようとするのであるが、現に建築中の校舎は予科校舎の第一部で、台地の殆ど中央部に位し、近世式鉄筋コンクリート造三階建、延坪三千余坪、最新式の構造で、三月十五日に地鎮祭を執行してより工事は着々進捗し、既に基礎及び二階床のコンクリート打を終了し、窓サッシュ石材工事等は下塗中で、付帯工事たる電気、衛生、暖房等の配線及び配管工事も進捗中である。本工事は昭和九年二月末日竣工の予定である。

新しいキャンパスの構想には、予科のみならず普通部・商工学校の移転も含まれていた。それは寄宿舎および体育施設の建設とあわせ、まさに「理想的一大学園」の建設と呼ぶにふさわしいものであった。その中央に位置する「最新式の構造」による第一校舎は、まさに理想的な新しい学園を象徴するモニュメントとして建築されたのである。

では、その「理想」とは何か、また「最新式の構造」とは如何なるものか。次回より少しずつ報告していきたい。



慶應義塾大学予科第一校舎 1934年5月撮影

福澤研究センター所蔵

連載

日吉海軍こぼれ話 〈その1〉

日吉の食事

山田 譲(運営委員)

今回は「地下壕設備アレコレ」はお休みして、日吉の海軍の食事の話です。日吉に海軍が来たころは日本中食糧不足で、子どもたちもガリガリにやせ細っていた時代でした。まして南方の戦地では食糧補給を断たれ、栄養失調と餓死者が続出していました。そういう中で日吉海軍の食糧事情はどうなっていたでしょうか。

まず連合艦隊司令部の幕僚たちの食事です。司令部のあった寄宿舎付近の丘からボーンチャイナ(高級磁器)の洋皿の破片が出土しています。もともと海軍はイギリス海軍をお手本にしていたので、食事は洋食がよく出されました。戦艦武藏の艦上に司令部があつたときも、昼はフルコース、夜は和食で、一流ホテルの料理長が呼ばれてきて調理していました。日吉でも同様だったようで、違うのは軍楽隊の演奏がなくなったこと位のようです。皇族の軍人(高松宮、三笠宮など)が来ると食卓は一段と豪華だったようで、そういう時に給仕の兵士が粗相をするとあとで猛烈な制裁を受けたそうです。

寄宿舎の横にはニワトリ小屋があつて七面鳥も飼われていて、豊田副武司令長官はニワトリが生んだタマゴを数えていたそうです。ウーン、司令長官の仕事はタマゴ数えだったのかあー。これじゃ司令部から出撃命令を受けた特攻兵士はうかばれません。地下壕の中には食糧倉庫があつて酒やウイスキーもふんだんにありました。敗戦後、警備の兵隊は毎日宴会だったそうです。戦時下の日本とは思えない別世界です。

では軍令部第三部や人事局の将校や理事生がいた第一校舎はどうだったでしょうか。人事局に勤めていた元理事生の方のお話では、肉入りのシチューと真っ白いコッペパン2つが昼食に出たそうです。その方はパンを残して自宅に持ち帰り、弟たちがそれを喜んで食べたそうです。航空本部の地下壕に勤めていた元理事生の方は、白いご飯を食べられたと言っています。これも当時としてはめぐまれた話です。

では下級兵士はどうだったでしょうか。第一校舎の1階の1部屋は通信兵が寝泊まりしていて、食事もそこで食べていました。元暗号兵の人の話では、ご飯は麦飯(米と麦が半々)で味噌汁と何かおかずがついたそうです。量は「給与」として決まっていてまずまずだったが、若い食べ盛りだったのでもっと食べたかったそうです。しかし食事は食卓なしで床に畳を敷いた上に食器をおいて食べていたそうです。戦争末期になると地下通信室の近くに半地下式の「カマボコ兵舎」をつくって、そこで食事もしていたそうです。なお調理するのは主計兵(事務的業務をする兵士)だったそうで、いかにもますそうですね。

(出典——「慶應義塾生協ニュース」、体験者聞き取り、他)

連載

ガイド養成講座を受けて

日吉台地下壕ボランティアガイドに参加して

梶間谷 允

日吉台連合艦隊司令部地下壕は、最初怖いもの見たさで数年前の夏に、定例見学会に参加しました。その時、通信室での説明の際、説明の方が「電信のキーを押しっぱなしにして、ツーナーッ(ツツツ)・・・・・」と。今まである程度ざわついていた見学者全員がシーンとなつたと同時に、夏の洞内天然冷房に加えゾーッとしたものでした。

それ以後、あの話術は素晴らしいものだと思いながらもそのままだつたのですが、2年ほど前に区役所の広報誌だったかをみて、ボランティアガイド養成講座を開催するとのことで、参加しました。

元来好奇心が強く、昔のことを知りたいと図書館を訪れていましたが、読むだけでの独りよがりだったのに、ガイドとしては先輩方からの新しい資料の提供や聞き取り調査内容を教えていただき、伝える内容をより



ボーンチャイナ製洋食器



梶間谷允さん

深く突き詰め、いかに参加者に理解してもらうかが大切と思うようになりました。

説明と言えば、バスガイドさんのように説明は立て板に水と言うのはいいのですが、あまり説明に慣れきって、普通に話すときと異なった声や何だか変な言い回しになり、何か心がこもっていないと言う面があつたり、どこかの放送のようにやたら感情をこめて話し、結果的に聞いている人を白けさせることになってしまふようになりたくない、毎回説明するたびに「初心忘るべからず」と思いながら説明をしているのですが…、度々説明内容をぶつ飛ばしたりして、後で思い出して反省しきりです。これからも地道に努力をしたいと思います。

★活動の記録 2013年9月～11月

- 9/20 地下壕見学会横浜ぶらり歴史散策の会 28名 会報112号発送(慶應高校物理教室)
 9/26 運営委員会(慶應高校物理教室)
 9/27 地下壕見学会 小田原教会 23名
 9/28 定例見学会 57名
 10/4 横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会(法政第二高校)
 10/7 地下壕見学会 城郷・小机地区センター 40名
 10/9 地下壕見学会 日吉台小学校6年生 110名
 10/11 横浜・川崎平和のための戦争展 準備(来往舎)
 10/12 地下壕見学会(戦争展関連イベント) 52名
 10/12・13 第21回横浜・川崎平和のための戦争展(来往舎)
 10/22 地下壕見学会 曹洞宗神奈川県第二宗務所 50名
 10/26 定例見学会(強力な台風直撃の予報により中止)
 10/30 運営委員会(慶應高校物理教室)
 11/6 地下壕見学会 矢上小学校 18名
 11/8 地下壕見学会 港北うるびイーサロンワーカーズコレクティヴ「路」 25名
 11/9 ヒヨシエイジ主催 日吉フェスタに参加
 展示・書籍販売・「ぶらへりキャンパスウォーク」のガイド
 11/12 地下壕見学会 全労連東京小平・東村山・東大和共済会 25名
 11/15 平和のための戦争展反省会・戦争遺跡保存全国シンポジウム2014年川崎大会現地
 実行委員会発会式(慶應義塾日吉キャンパス麺コーナー)
 11/16 ガイド学習会(菊名フラット)
 11/18 地下壕見学会 日吉本町西町会・明治大学平和教育登戸資料館 45名
 11/20 地下壕見学会 調布9条の会憲法広場 27名
 11/22 運営委員会(慶應高校物理教室)



日吉イチョウ並木

★予定 12/3 会報113号発送(慶應高校物理教室)

○定例見学会 12/14(締め切りました) 1/25・2/22・3/22(土)

☆地下壕見学会は予約申込が必要です。

お問い合わせは見学会窓口まで Tel 045-562-0443(喜田 午前・夜間)

連絡先(会計)亀岡敦子:〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 Tel 045-561-2758

(見学会・その他)喜田美登里:横浜市港北区下田町2-1-33 Tel 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会